

## 「機関マネジメントコースの教員になって」

海事マネジメントコース

三輪 誠 (みわ たかし)

### 1. はじめに

海事科学研究科の博士後期課程を2012年に修了しました

三輪 誠 (みわ たかし) と申します。

富山県魚津に実家があり、父親が上下水道の敷設と冷暖房装置の設置/修理を取り扱う配管業を営んでいます。

幼少の頃、よく父親のアユ釣りに連れて行かれ、専ら釣れた魚を針から外す、つまらない小僧をしていました。中学生になり、ようやく自分の竿を手にして海や川へと釣り三昧な日々過ごしました。特に川釣りに思い入れがあり、水面を凝視して、揺れ動く魚影を探すのは楽しく、また、息を殺して仕掛けの流れに入れる一投目の緊張感がこの上なく好きでした。そんな風でしたので、将来は「釣り」で生計を立てたいと思うほどでした。

振り返れば、その頃に海・船への憧れが芽生えていたのだと納得できます。



(若かりし頃の筆者と愛犬たろう)

船乗りになる切っ掛けは中学3年時、担任のひと言でした。「商船高専なんか、どうだ？船に乗れるぞ。」それから5年半、1992年10月に富山商船高等専門学校（現：富山高等専門学校）機関科を卒業、1993年4月に東京商船大学（東京海洋大学）商船学部機関システム工学課程へ編入学、1995年4月に運輸省航海訓練所（現：独立行政法人 海技教育機構航海訓練部）へ入所、念願の船舶職員の入口に立ちました。

当時、4月採用者は私だけでしたので、所長より直々に辞令を受け取り、その後の研修も担当者とのマンツーマン、すべてが特別待遇の緊張した1週間であったことを記憶しています。その翌週の月曜日、長崎の小ヶ倉埠頭より練習船青雲丸へ次席三等機関士として乗船し私の機関士人生が始まりました。

航海訓練所在籍中の2003年1月～3月、川崎汽船の最上川丸にてペルシャ湾まで行く航海に研修乗船し初めて社船で働く雰囲気も知りました。そして2004年4月～2006年3月に海事科学部附属練習船「深江丸」へ機関長としての乗船勤務、大学教育の授業や実習を経験しました。それらは”ひと所に居ては知れないことが多い”ことを知れた貴重な時間でした。いずれの勤務発令も横浜寄港の際に、上司の科長から直接呼び出しを受け、その場で即決したものでした。取分け深江丸への乗船勤務発令は引越し先が神戸の官舎になるため、愛犬たろう（8歳, Labrador）との辛く悲しい決別を強いられました。今でも辛い別れを思い出す時があります。その後航海訓練所を退職して富山高等専門学校を卒業を経て、2013年4月より神戸大学大学院海事科学研究科に教員として勤めています。

現在の研究テーマとして“Design for safety”を掲げ、船舶機関士の作業がより一層“効率よく安全に遂行できる”ように、また機関室の資源管理を行うためのデザイン（環境や方法、思想など）の向上を考えています。

## 2. リーダーシップ

海事科学部では、マリンエンジニアリング学科機関マネジメントコースの学生を対象とした授業のいくつかを担当しています。授業では船舶機関士としての経験を用い、演習を交えて教授することで、学生の理解を助けているだろうと期待できる瞬間が多々あります。航海訓練所に勤めている時から、人と話し合っただけで何かを教えることを心地良く思っていました。自身の経験が活かされる喜びや苦境の克服経験を経て今の自分があることが支えとなり自身を平安な気持ちに或いはモチベーションアップへと繋げています。

一方で、私自身がもう一度、学び直さなければならない授業も担当しています。3年生前期に開講している「リーダーシップ」はその1つです。小学校の理科の授業以降、私たちは、演習や実験の場面において、少人数で構成されるチームに分けられていました。演習や実験ではチーム毎に与えられた課題に取り組み、個々に成果を求めて奔走していたように思います。チームが編成されて間もなく、チーム内には自然と代表者が現れ、その彼や彼女に従ってメンバーは作業を分担し、成果をまとめて先生に提出する、といった具合に進みます。大学においても、教室授業のほかに実験室にて演習があり、前述と同様にして、複数の班が編成され、課題に取り組みます。私の学生時代のいずれの商船系の学校においても、「リーダーシップ」と定めて学ぶ時間は配置されてはいませんでした。そして、その必要性を意識した事はありません。しかしながら、定期的にリーダーシップという言葉は耳にしていました。練習船乗船式にお世話になった船長のお言葉にもありました。

「…、乗船中は特に、3つのシップを意識してもらいたい。リーダーシップ、フレンドシップ、シーマンシップ、…」。私たちは、小学校の理科の教室に見られたように、それこそ乗船実習に至るまで、様々なタイミングにて「リーダーシップ」を意識付けるように期待されていたのかも知れません。リーダーシップはリーダーとフォロワーとの間で構成されています。両者の間の良好なコミュニケーションにより、リーダー、フォロワーが効果的に

機能できます。そう考えて、全 15 回から成る授業は先ず、コミュニケーションの基礎・基本から始めています。

ある年度の第 1 回の授業では、教卓の前に座っていたヨット部の学生を指名して、クラブ勧誘シーズンの頃、初対面の 1 年生とどのようにコミュニケーションを取り、入部を勧めるか、「君なら、どうするの？」具体的に手順を聞きます。すると、“こんにちは、部活やサークルは決めましたか？”、“いま、体験入部をやっているのだけど、ヨットに興味はある？”、といったぐらいのやりとりで、当然、期待した成果は得られない様子でした。

そこで、例えば、次のような具合です。

“こんにちは、ヨット部 2 年の三輪といいます。出身が富山でヨットは大学から始めたけれど…”。目の前の相手にとって自分が何者であるか、示せば示すほどに、相手の不安は軽減されます。そして、出身地やアルバイトなどプライベートな情報が加わり、それらに自分との共通点が見つかればさらに安心感を生みます。自分の目の前で一生懸命に自分に話しかける相手を少し信じてみようと思いはじめめるのです。

このようにお互いが信頼を得る努力をするうち両者の間には良好なコミュニケーションが築かれるようになります。まず、自分を示しそれから相手を知ろうとする事が誠意のある正しい方法なのです。



(帆船みらいへにて、溝口機関長とともに)

### 3. 東京か神戸か

航海訓練所に在職していた頃感じていた航海士と機関士とでは、意見や意識が異なっていて、地面に見えない線を引くように、互いに区別し合っていたように思います。そし

て、東京・神戸のいずれの出身校であるか、細分する風潮があり何かにつけて“おまえ、東京か神戸か。”という話題になります。

私の実家の富山の文化は、どちらかといえば関西に近く、エスカレータも右に乗りますし、うどんの汁も澄んでいます。しかしながら、私も東京商船大出身であり、少なからず東京ビイキでした。実習中の両大学の学生たちに対して、彼らを区別する意識は無いものの神戸だから東京だからとつい見てしまうこともありました。

東京は学生寮が整理・廃寮された時期が神戸より早く、寮生減少による縦や横のつながりが希薄になりつつあったことは否めません。学生の多くは、何かにつけて冷めていて、まとまりの無いように思っていました。そして、出身研究室を訪れた時、なるほどと思える事も多々ありました。船乗り気質を持った先生方が多く退職した事も大いに影響し東京の学生に対し、偏見を抱いていたのかも知れません。

東京か神戸か。航海か機関か。そして何期であるか。これらは日が暮れて以降、越中島や深江の界限でも、訊かれる出題頻度の高い質問です。これがクリアされて、ようやく相手との信頼関係が結ばれ、コミュニケーションが取れるようになります。それまでは、相手が幾つぐらいであるか、爪の汚れ具合やあご紐の日焼けを探しては、デッキ？エンジン？の質問牽制球が投げ続けられます。東京か神戸か。最近になって、精度の高い判別方法を発見しました。

#### 4. 常に気力と体力を

総合学術交流棟 1階ロビーに掲げられている“常に気力と体力を”。現役学生の誰もが耳に留め、世代を超えて受け継がれている魂が存在しています。東京か神戸か。このフレーズを声に出し反応するのは必ず…神戸、というわけです。

2013年に本学へ着任して以来、卒業式や海神会、部活動のOB会、あらゆる場面のスピーチに登場し、話題をさらう様を目撃しました。誰もがその言葉を聞くと納得し、うなずいています。東京にもそのような魂があったならば、と羨ましく思います。

しかし両大学を経験した私には在学中、乗船実習中、更には社会人となってからも青春時代の苦楽を共にし、同じ釜の飯を食った仲間と築いてきた、経験、絆が自身最大の財産であると分かってきたからです。

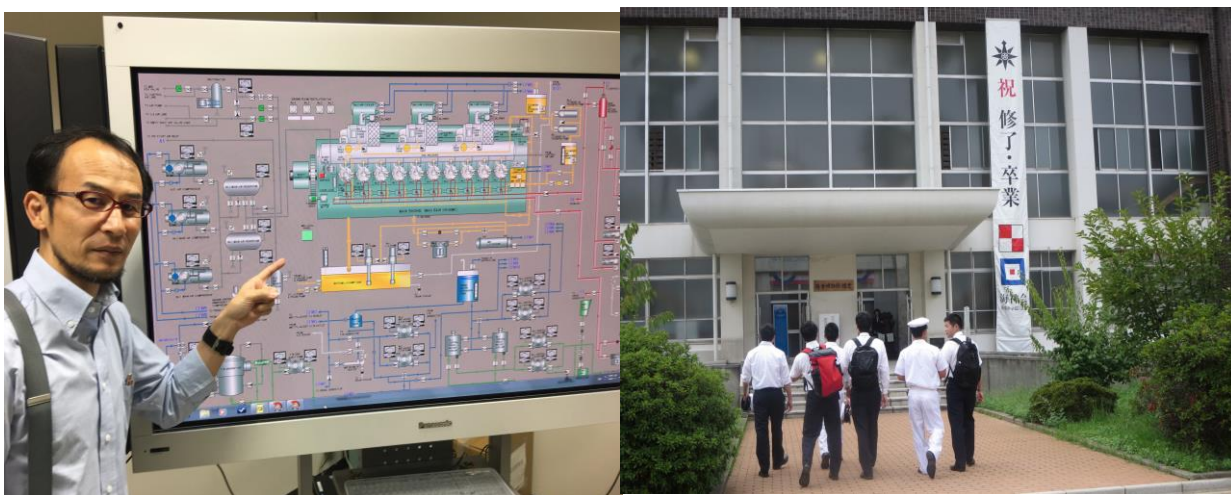




## 5. おわりに

両大学の優劣を無理に結論付けることは全くナンセンスなことは皆さまも同感だと思います。古今東西、欧米にも日本にも長い歴史を持つ二つの大学がお互い切磋琢磨しそれぞれの特色を生かしてその道で活躍している名門校は数多くあります。それと多感な青春時代に寝食・苦楽を共にし、学んだ専門知識、実習、卒業研究、課外活動等の経験は貴重な財産です。今後の人生に大いに生きてくることを忘れてはならないと思います。

2013年に着任して、次の春には5年が経過します。徐々に神戸も見えて来て、これまで見えてこなかったことも、先ずは信じてみようかと思えるようになりました。良好なコミュニケーションには、お互いに相手をよく知り、相手を思うことが必要です。さて、皆さま、私が何者であるか、少しは知っていただけでしょうか。深江キャンパスにお越しの際には、是非お声掛け下さい。



<おわり>

### 【編集後記】

この度は、三輪 誠 先生ご寄稿ありがとうございます。

この原稿は、海神会だより No. 14 に掲載予定でしたが紙面スペース調整等の関係で掲載出来ず海神会ホームページの掲載欄に、この度、掲載させていただきました。

神戸か東京か、旧商船大学の時代の教育現場の内側から両校を見てこられ、また航海訓練所、社船の乗船経験者ならではの持論を後輩に教育する姿を手取るように分かりよく表現していただきました。

若い学生達への教育が実社会での活躍や研究者の正しい取り組み姿勢にも繋がります。それぞれの進路は千差万別です。基本を強固にすれば本筋から大きくぶれないそれぞれの道を切り開く力も育ちます。

時代背景も学生気質も年々変わります。三輪先生のご健勝と今後の一層のご活躍をお祈り申し上げます。

海神会事務局 神吉行彦